

## 日本ナイル・エチオピア学会第 25 回学術大会公開講演会プログラム・要旨

### 【日時】

2016 年 4 月 16 日（土曜日）

13 時半—17 時半

### 【会場】

白浜荘

〒520-1223 滋賀県高島市安曇川（あどがわ）町下小川 2300-1

電話：0740-32-0451

会場の位置、経路の詳細に関しては、以下をご参照ください。

<http://www.shirahamaso.co.jp/kotsu.htm>

### 【使用言語】

英語（通訳なし）

### 【プログラム】

1. 開会のあいさつ 13：30～13：40

2. 講演① 13：40～14：30

ティム・アレン&メリッサ・パーカー

‘Humanitarian Impunity, Criminal Justice and Invisible Children: Social Consequences of the War with the Lord’s Resistance Army’

「人道的免責、刑事上の正義、および見えざる子どもたち——対 LRA 戦争の社会的結果」

3. コメント 14:30-14:50

川口博子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

米川正子（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科）

4. 質疑応答 14：50～15：10

5. 休憩 15：10～15：20

6. 講演② 15：20～16：10

メリッサ・パーカー&ティム・アレン

‘Deworming Delusions: Mass Treatment for African Parasites in a Biosocial Perspective’

「寄生虫駆除の欺瞞——生物・社会的視点から見た、アフリカにおける寄生虫の大規模治療」

7. コメント 16：10～16：30

西真如（京都大学グローバル生存学ユニット）

浜田明範（関西大学）

8. 質疑応答 16:30～16:50

9. 総合討論 16:50～17:30

司会

栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科）

#### 【講演者プロフィール】

##### ■Tim Allen（ティム・アレン）

ロンドン大学経済学院（LSE）国際開発研究科長、教授。開発人類学者。複合的人道危機、民族紛争、強制移住、健康と癒しに関する土着の概念化、援助の倫理とエージェンシーなどを主な研究領域としている。東アフリカ、特に南スーダン、ウガンダ、ケニアでの豊富な調査経験を持つ。主な業績に *Trial Justice: the International Criminal Court and the Lord's Resistance Army* (Zed Books, 2006); *Poverty and Development into the 21st Century* (T. Alan との共編著、Oxford University Press, 2000); *In Search of Cool Ground: War, Flight and Homecoming in Northeast Africa* (編著、James Currey, 1996) 等。最近の論文には、“Justice at the Margins: Witches, Poisoners, and Social Accountability in Northern Uganda,” *Medical Anthropology* 34(2) (Reid Kyla との共著、2015); “Vigilantes, Witches and Vampires: How Moral Populism Shapes Social Accountability in Northern Uganda,” *International Journal on Minority and Group Rights* 22 (3) (2015); “Is 'Genocide' such a Good Idea?” *British Journal of Sociology* 62 (1) (2011) 等がある。

##### ■Melissa Parker（メリッサ・パーカー）

ロンドン大学衛生熱帯医学院（LSHTM）公衆衛生・政策研究科、グローバル・ヘルス&開発専攻上級講師。医療人類学を専門とし、アフリカ各地で様々な調査に携わる。主な調査テーマとしてはイギリスにおける HIV、ケニアにおける健康関連 QOL、スーダンにおける女子割礼、スーダン、ウガンダ、タンザニアにおける顧みられない熱帯病（NTDs）等がある。主な業績に *Learning from HIV and AIDS*, (G. Ellison, C. Campbell との共編著、Cambridge University Press, 2003); “Rethinking Female Circumcision,” *Africa: Journal of the International African Institute* 65 (4) (1995 年)、最近の論文には、“Will Mass Drug Administration Eliminate Lymphatic Filariasis?: Evidence from Northern Coastal Tanzania,” *Journal of Biosocial Science* 45 (4) (Tim Allen との共著、2013); “Border Parasites: Schistosomiasis Control among Uganda's Fisherfolk,” *Journal of Eastern African Studies* 6 (1) (T. Allen, G. Pearson, N. Peach, R. Flynn & N. Rees との共著、2012) 等がある。

## 【講演要旨】

### ■講演①

ティム・アレン&メリッサ・パーカー

#### ‘Humanitarian Impunity, Criminal Justice and Invisible Children: Social Consequences of the War with the Lord’s Resistance Army’

「人道的免責、刑事上の正義、および見えざる子どもたち——対 LRA 戦争の社会的結果」

人道支援活動家たちは、法律や原則にはじまり、宗教的・医学的価値や、最善慣行（ベストプラクティス）や倫理的ガイドラインに至る、規則と規範に依拠している。こうした規則と規範は、あきらかに凝集的で予測可能な空間を創り出す。フィールドにいる人道支援活動家たちは、彼らがときには目撃するおぞましい出来事から距離を保つことができるだけでなく、そうした出来事と無関係でいることができる場所を確立する。こうした傾向は、人道支援活動家の故郷におけるものとよく似た奇妙な生活が再生産される「コンパウンド」（壁や柵で囲われた人道支援団体の事務所と職員住居）や援助関係者が居住し働く町の設立によって、一層強化される。人道支援活動家たちは、援助対象者たちに対する共感と、自分を保つことのあいだのバランスをとることを常に求められている。彼らは、援助対象者とかかわりを制度化しなければならない一方で、対象者とかかわらないことを弁明する必要がある。ここに危険が潜んでいることはあきらかだ。つまり、認知上の不協和と人道的免責の危険である。本講演のテーマは、中央北部ウガンダのアチョリランドの戦争地域における認知的距離と人道的免責である。

アチョリランドは、数十年にわたる武力紛争の影響を受け、3万人以上の若者が「神の抵抗軍」（LRA）に誘拐されたり参加したりした。若者たちの多数は、逃亡するか、ウガンダ政府軍の捕虜となった。そして受け入れセンターを経て「故郷」へと戻った。受け入れセンターは、国際人道団体の支援のもとに運営されていたが、トラウマを負った子どもたちを含む、これらのセンターを通過していった若者たちが、その後どうなったのか、だれも知らない。彼らの多くは、劣悪な状況の避難民キャンプに居住し、彼らが LRA に加わっていたことを知っており、殺戮や身体の一部の切断などを強制されたかもしれないと思っている親族と暮らさざるをえなかった。彼らは、この地域の状況に関するメディア・キャンペーンのなかで焦点となった「見えざる子どもたち」（少年兵と元少年兵）よりとずっと見えない存在であった。かつて誘拐されたこれらの人びとがどうなったのかという問題は、より大きな問題の一部でもある。LRA との戦争は、地域に特定の結果をもたらしたが、地域を超えたグローバルな結果ももたらした。なぜなら国際刑事裁判所（ICC）が設置後初の調査を行ったのはこの地域であったし、この地域の状況のゆえに、最初の逮捕状が発行されたのだった。これまでに生じた激変と恐ろしい犯罪に対する説明責任を求める試みにおいて、人道支援活動家の占めるべき位置はどこにあるのか。

本講演は、戦前、戦中および戦後にわたる、長期間の人類学的フィールドワークに基づいている。とりわけ、234名に対するインタビューに基づき、LRAに参加した人びとになにが起こったのかに関する調査結果を報告する。インタビュー対象者は、グルの受け入れセンターの記録から10%のランダムサンプリングによって抽出した。北部ウガンダの戦後状況における社会的統合と排除の諸側面に注目する。多数が直面するのは「チェン」(cen、呪詛の一種、死霊の復讐)の問題だ。チェンとは、暴力の被害者と加害者が発散する害悪をもたらす力であり、社会的癒しを不安定化させる。もうひとつの問題は、伝統的正義を唱道する人たちがその役割を強調してきた地域的な和解儀礼の意義の相対性である。戦争に巻き込まれた人びとの生きられた経験と、彼らを助けしていると称している人びとの規範的前提のあいだには、おおきな乖離がある。他方で、戦中に活動していた人道支援団体のほとんどは撤退し、メディアの関心も他の地域に移ってしまったという状況がある。現在、ICCはLRAの司令官のひとりを追迫しているが、その裁判はおおむね無視されている。そして、国連の高官が2003年に「最悪の人的危機」と形容した事態に対する、人道支援団体も含む関係者の説明責任は、たんに忘却されている。

## ■講演②

メリッサ・パーカー&ティム・アレン

‘Deworming Delusions: Mass Treatment for African Parasites in a Biosocial Perspective’  
「寄生虫駆除の欺瞞——生物・社会的視点から見た、アフリカにおける寄生虫の大規模治療」

東アフリカの学齢期の児童に対する寄生虫駆除に関する近年の論争は、世界銀行のウェブ・サイトにおいて「寄生虫戦争」と呼ばれている。この問題に対する関心は高い。寄生虫駆除は、感染症との闘いにおける最重要の課題のひとつとなった。主要な経済学者や疫学者はこの考えを強力に推進しており、貧困の問題に終止符を打つ可能性があるとき主張している。彼らはアメリカ、日本、および他の地域の歴史的事例を引用し、1990年代末以降にケニアで収集されたデータと、それに基づき2004年に出版された1編の重要論文をとくに重要視している。

WHO、ビル・ゲイツ財団、世界銀行などは、この寄生虫駆除アプローチを採用し、学校に基づく治療が、大規模な薬品大量投与の主要な手段になっている。現在の、薬品大量投与に関する統合的アプローチは、世界史上でも最大のグローバルな健康プログラムとなっている。しかし、ウガンダとタンザニアにおける生物・社会的な調査の結果によると、問題は、主導者たちが主張しているほど単純ではない。

東アフリカのさまざまな場所における人類学的フィールド調査に基づき、生物学的・社会的証拠に依拠しつつ、本講演では、学校を足場とする寄生虫駆除に関する主張は、楽観的すぎることを示す。ケニアの生徒における寄生虫駆除に関する、よく引用される2004年

の論文は、介入を推進するために用いられてきたが、その内容は疑わしい。無作為に抽出された薬品投与事例の体系的な再検討によると、寄生虫駆除は公衆衛生の全体を改善するとは言い難い。また、地域の学校における調査が、薬品の普及度が目標値を下回っていることを示している一方で、寄生虫駆除という概念を、さまざまなおおきく異なる寄生虫の感染症に、そして異なる治療法に適用することから、混乱が生じている。データが存在する場所のほとんどでは、感染率は残念ながら高いままである。

無制限で無料の寄生虫駆除が行われたい限り、風土病の感染率低下は期待できそうにない。さらに、これはおおむね無視されてきたが、薬品大量投与に伴う社会的問題がある。寄生虫感染で衰弱した子どもを治療することは適切な行為であることには疑いの余地はない。しかし、無差別の寄生虫駆除を過剰にプラス評価することは逆効果である。調査資料を提示する一方で、私たちは、このような重要で広く推進されている介入に関して、批判的に関与する民族誌的フィールドワークを行うことの困難さと可能性について、自省的な考察を行いたい。私たちは、以下の諸問題について論争的な疑問を提出する——証拠の質について、証拠がいかに政策の選択に結び付くかについて、高額の研究助成金が、収集されたデータをどうかたち作り、その提示にどう影響するかについて、両親の同意なしに小学校の生徒を治療することがいかに可能なのか（世界の他の地域では、こうした行為は倫理にもとるとみなされるだろう）について。